

第26次辺野古支援・連帯行動 に参加して

群馬県・あおば薬局前橋店 事務 浦山 優作



はじめに

辺野古支援・連帯行動とは、沖縄県名護市にある米国海兵隊駐屯地キャンプ・シュワブに普天間基地の機能やヘリコプターポートを含む新しい基地の建設計画に反対する住民の運動に支援・連帯する民医連の活動です。

今回、第26次辺野古支援・連帯行動として7月12～14日に参加し、学び、感じたことなどを報告します。

米軍基地見学

初日の12日は普天間基地と嘉手納基地、米軍士官兵の居住地域を見学しました。まず、普天間基地は住宅密集地の中にあり、近くには学校も点在していて、非常に危険な基地であると感じました。2004年には、実際にこの基地の近くにある沖縄国際大学へヘリコプターが墜落しました。そのようななかで、何度も墜落事故を起こしているオスプレイの配備が計画され、より危険な基地になろうとしています。その一方で、米国本国の基地は人

里離れたところにつくられ、ヘリコプターや軍用機が住宅の真上を通ることはないことを知り、あらためて普天間基地は撤去すべきと思いました。

次に、米軍士官兵の居住地域を見学しました。住居はどれもとてもきれいで、沖縄の人々が暮らす場所ほど建物は密集しておらず、とても恵まれた環境にあるのがよく分かりました。しかも、住宅と水道光熱費は無料で、基地の水道光熱費も含めて日本政府の思いやり予算(私たちの納める税金)から支払われていることを知り、なぜ米軍にここまで手厚い待遇をするのかと憤りを感じました。

続いて嘉手納基地を見学しました。嘉手納町では基地と共存する道を選び、基地の近くに道の駅を作っていました。基地を見学する方に立ち寄ってもらえるようにしてあり、沖縄のなかでも基地との付き合い方が異なることを学びました。また、嘉手納基地でも思いやり予算で1基5億円もするシェルターが10数基も作られていて、米国がさらに作るよう要求していることを知りました。国はその予算を米国のためではなく、社会保障など国民のために使うべきではないと感じました。

辺野古座り込み行動

2日目は、まず辺野古の新基地建設予定地で絶滅危惧種のジュゴンが生息する海の調査を行いました。海はとてもきれいで、なぜここに基地を建設するのか、私には全く理解できませんでした。

私たちが参加した日は現地の方が座り込みをはじめて3008日目、基地建設はまだ進んでいない状況にありました。座り込みを続けている住民の方々を見て運動を続けることの大切さ、主張を伝えるために行動する勇気を学びました。また、現



普天間基地見学の様子

地では子どもや孫に美しい海を残そうと反対運動を行う住民がいる一方で、漁業関係者の中には魚が取れなくなっているため、基地建設を認め、補償金をもらって生きていこうと考える方もいて、家族のなかでも賛否が分かれてしまうような緊張状態にあるとのことでした。

当初の予定ではヘリパッド建設予定地の東村高江でも、建設を阻止する座り込み行動を行うことになっていました。しかし、7月に入って防衛局に動きがあり、座り込みをしている人々への対応が厳しくなりました。そのため、防衛局と鉢合わせする可能性があり、当日の座り込みは断念せざるを得ませんでした。高江でも住民が大切な森のためにたたかっていることを学びました。

戦跡めぐり

3日目は戦争中どのような状況だったのかを知るため、まず糸数アブチラガマへ行きました。アブチラガマとは自然洞窟で戦時中は日本軍の陣地壕や陸軍病院の分室として使用された場所です。不衛生でとても暗く、明かりがないと何も見えない中で、当時は医療を行ったり生活をしていたとのこと。続いてひめゆり平和記念館へ行きました。「ひめゆり」とは、沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の愛称のことで、平和記念館では彼女たちの青春時代から戦争に巻き込まれた歴史をパネルなどで紹介されていました。

館内には、元ひめゆりの学生で生き残った方が当時の出来事や様子を詳細に話されていて、「私はあなたたちに伝えるために生き残った。戦争はもう繰り返すべきではない」と語られていました。また、生存者の証言本があり、戦争中のとても生々しい状況を知ることができました。

おわりに

今回の辺野古支援・連帯行動に参加するために、初めて沖縄に行ったのですが、本当に日本なのかと思ってしまうほど米軍基地は広くて何カ所もあり、数多くの米軍ヘリコプターが飛行しており、沖縄はまだ米国に占領されているように感じました。

また、普段平和や戦争について考える機会は多くないなか、3日間通して戦争の歴史を学び、戦争に兵士を送り出す米軍基地などを見学すること



辺野古で座り込みをする参加者



辺野古基地建設予定地(キャンプ・シュワブ沿岸)



キャンプ・シュワブの前で、班のみんなと一緒に

で戦争の悲惨さ、平和の尊さをあらためて実感しました。

さらに辺野古や高江の運動は本土にいるとなかなか情報が入ってこないし、民医連職員全員がこの運動に直接参加するのは難しいと思われるため、今回の運動に参加した人たちが辺野古や沖縄で経験したことや現地の方々から聞いた話を職場に戻って職員に伝えることが重要だと思います。

そして、基地計画を白紙撤回させるために、署名などできることをしていきたいと思います。最後に忙しいなか、沖縄に送り出してくれた職場の皆さんにこの場を借りて、感謝したいと思います。